

# プラトニック夫婦

武者小路 胸熱

(1)

19世紀に活躍したアメリカ人コラムニストのアンブローズ・ピアスは、その著書の中で、プラトニック・ラブを「不能と不感症の間の愛情を指す、馬鹿がつけた名前である」なんて独断と偏見で決めつけているのだけど、要するに彼の言わんとするところは「セックスが伴わない男女間の恋愛なんて有り得ない」ということなんだろう。まあそうだよ。普通は。

けれども、いわゆる恋人同士という男女関係ならどちらかが冷めた時点で別れればいいけれど、結婚という社会的契約を交わし、さらには子どもまでもうけた夫婦にとってはちょっと事情が変わってくるわけで、つまりは夫婦間においては必ずしもピアスの定義をそのままあてはめるわけにはいかないのではないか。

少なくとも僕と妻の関係においては…。

僕の名前は大久保洋之。都内のとある中堅食品メーカーに勤める46歳。来年小学校に上がる双子の息子がいる。

生まれ故郷である金沢の高校から都内の大学へ進み、ごく普通に就活から新卒入社してそ

ろそろ二十余年。それなりにまじめにコツコツ働いてきたことが評価されてか、来年度からは次長に昇格することが内定している。

仕事人間というほどではないけれど、世の多くのサラリーマン同様、出世もしたいしそれなりにヤリガイも感じているし、給料もそこそこ、どちらかといえば家庭よりも仕事を優先してきたかな。

妻の由香は僕と同じ46歳。彼女は高校時代の同級生で、当時はお互いの存在を知っている程度だったんだけど、10年前に同窓会で再会したのをきっかけに東京へ金沢の遠距離恋愛がスタートした。

その頃、由香は地元金沢の広告代理店でクリエイティブ関連の仕事をバリバリこなしており、早くに結婚して専業主婦になった同級生たちの中でもひとときわ輝いていた。僕も由香もそれまでに何人かの相手と交際したことはあったけど、僕はたまたま前の彼女と別れたばかり、由香はちょうどフリーだった。由香によるとそれまで付き合った男性はみんな、深く知れば知るほど根っこの部分での価値観が自分とはちよつと違っており、一年も続かなかったそうだった。

同郷だから僕は何かと口実をつくっては頻繁に帰郷し、そのたびに由香とデートを重ねた。彼女は一本気で周囲に流されることなく自分を貫くタイプで、ちよつと勝気なところもあるけどそれもまた魅力のひとつ。同い年ということもあってか、何でも対等に話せるし考え方も近い。高校時代の思い出、仕事のこと、家族のこと、人生のこと、いま世の中で起きていること、くだらないこと……。いろいろなことを語り合った。

遠距離恋愛というのは好きな時にすぐに会えないという大きな欠点があるけれど、自由に会えないからこそ、ふたりで過ごす貴重な時間を大切にできる。そのひとときを一分一秒も無駄にしたくないから、相手を思いやるし寛容で優しくなれる。セックスも濃密で刺激的なものになる。30代半ばの男盛りと女盛りで、あまり品のいい言い方ではないけれどとにかくやりまくったよ。ホテルにこもって朝から晩までやったこともある。

全てが自由で、新鮮で、今振り返ってみると僕の人生でこの頃が一番楽しかったひとときだったかもしれない。

実際に言葉に出すことはなかったけど、年齢のこともあったし、付き合い始めた早い段階から僕も由香もぼんやりと結婚は意識していた。ただ、お互い仕事が充実していて楽しかつ

たこともあって、その頃はどちらかが仕事をやめるといふ発想はなかった。

ところが、由香の会社が企画した大きなイベントが、スポンサー企業の突然の撤退で開催直前に中止を余儀なくされたことがきっかけで資金繰りが悪化。見切りをつけた能力のある幹部社員が次々と会社を離れていく事態に発展する。

由香が夜中に泣きながら電話をかけてきた時のことは、今でもよく覚えている。

「私、会社…辞めようかな」

「どうした？何かあった？」

「平山さんも辞めちゃうんだよ」

「そうなんだ？入社した頃からずっと世話になって、仕事のイロハを教わった上司がいなくなるのは辛いね」

「同じ部署の仲間には前から内々で話があったんだけど、いよいよ今月いっぱいまで辞めて独立するって。美佳子は平山さんについていくって言うてる」

「それで由香はどうしたいんだい？由香も平山さんについていく？」

「私も誘われた。でも、私は平山さんも含めて今の社風というか雰囲気が好きだっ

たんだよね。肯定的で前例に囚われず何でも挑戦させてくれるところ。でも、平山さんが立ち上げる会社はしばらくは手堅い案件しか扱えないと思うし、本人もそう言うってた」

「由香には会社に残るといふ選択肢はないの？」

「なくはないけど、ポーナスも当分ないだろうし、もしかしたら潰れる可能性もあるって言われている。平山さんは独立するし、田中さんも先月辞めちゃったし。あのふたりは会社のツートップだったから」

「残ったとしても今までと同じようにはいかないってことか」

「そう。平山さんのところに行っても、今みたいな仕事はできそうもないの」

「そうか…。じゃあ、東京に出てくるか？」

「え？」

「結婚しよう」

(2)

僕たちの交際は、すでにお互いの両親には周知の事実で、そのうち結婚するんだろうと思われていた上、ある重大なミッション遂行のために結婚話は待ってましたとばかりにトン

トン拍子に進んだ。僕は新生活のために少し広い家に引越し、由香は会社を辞めて上京、先の電話から4ヶ月後には地元金沢で式を挙げた。披露宴では、由香の母親の家に代々伝わる加賀友禅の引き振袖を着た花嫁の艶やかな姿が今でも僕の脳裏に強く焼きついている。新婚旅行は1週間沖縄へ。準備期間が短かったこともあり、国内で、その代わりうんと贅沢しようという思惑は天気にも恵まれズバリ的中した。

そして、東京でのふたりの新婚生活が始まった。と同時に例の重大ミッションもスタートしたのだ。

僕と由香が付き合い始めたのはふたりが36歳の時。結婚した時僕たちはもう40代を目前にしていた。

そう。僕たちに与えられた重大ミッションというのは『子づくり』だ。

僕も由香もいつかは結婚して子どもをもうけたいという希望はあったけど、ふたりとも仕事中心の生活になっていたり、たまたま相手に恵まれなかったりで婚期を逃しかけていたところでの電撃結婚だったので子づくりは喫緊の課題だったわけだ。この結婚話が一気に進んだのも、お互いの両親の「早く孫の顔が見たい」という希望に強く後押しされていた

のは言うまでもない。

由香は由香で、すでにママになっている地元の友達から「早めに第一子を産まないとお産が大変」だとか「体力のあるうちに産まない」と子どものパワーについていけない」など数々の有難いアドバイスをもらっており、元々生真面目な性格の由香はかなりプレッシャーを感じていたようだ。

いわゆる「妊活」を始めて最初の頃は、コンドームを使う必要がないのがちょっとうれしくらいだったんだけど、すぐに義務感を伴うセックスはつまらないと思うようになった。生真面目な由香はいろんな本やネットから情報を集め、毎日基礎体温を記録して居間の壁に下がってるカレンダーに、妊娠しやすい日を毎月赤いマジックで大きくSと書き込むんだけど、それが目に入るのがだんだんうつとうしくなってきた。ある時なんか、残業で疲れて帰って、風呂に入った後すぐに寝ようとしたら「今日はやる日だからね」と言われてイラッとしたこともある。それ以来、出勤前玄関口で「今夜はやる日だからね」と念押しされるようになって朝からウンザリすることもあった。

結婚前は当然避妊していたわけだけど、いざ子づくりとなるとなかなかうまくいかないもので、すぐできるだろうとたか括っていた僕はだんだんセックスが苦痛になってきた。言葉にしくてもそういう気持ちには伝わってしまうもので、「これは私たちがふたりのため、そしてお父さんお母さんへの親孝行にもなるんだから協力してもらわないと困るの。私だって辛いんだから」と説教されてしまう始末だ。

由香の言うことは全く正しく、僕は1ミリも反論できないんだけど、半年が過ぎる頃には、僕たち夫婦のセックスはもうすっかり単なる子づくりのためだけの行為になっていた。

ある金曜日、夕食のテーブルにすりおろした山芋とスライスニンニクがたっぷり乗ったカツオのたたきが並んだことがあった。その日、会社で部下がつまらないミスを犯したことでイライラしていた僕はつい、カツオを一切れ箸につまみながらこんな嫌味を言ってしまった。

「あれ？カレンダーには印ついてないけど今日はやる日だっけ？これ食べて今夜もがんばってくださいってか？さすが由香、抜け目がないな」

その時の僕はとても醜い顔をしていたと思う。由香は悲しそうな表情で一瞥をくれただけで、何も言わず寝室に引きこもってしまった。実につまらない失態だった。由香は自分のできることを一生懸命にやっているだけ。失言を謝り、これからもふたりでがんばろうと話したものの、この出来事はこれからも由香の心にしこりとなって残るだろう。余計なことを言ってしまったと心から後悔した。

結婚と同時に妊娠が始まり、結婚生活が最初から辛いものになってしまった僕たちは、このままではきつとダメになってしまうという危機感を抱いた。後でわかったことだけど、僕の仕事中に金沢の母親から電話がかかってきて、遠回しにプレッシャーをかけられたことも度々あったらしい。由香は苦しむために僕と結婚したんじゃない。なんとかしなくちゃいけない…。

妊娠を始めて2年が経とうとするある日のことだ。

「ねえ、今度一緒に病院に行ってもらえない？」

「そうだな。実は僕も同じこと考え始めてんだ」

「こんながんばってるのにできないってことは、どこかに問題がある可能性もあるでしょ

う？西新宿にいい病院があるらしいの」

僕の仕事が休みの土日がいんだけど土日はすごく混むということで、2週間後の月曜日に有給をとってふたりで病院に行くことにした。

ところが、病院に行く前日の夕食中、突然由香が言った。

「違うかもしれないけど、私、妊娠したかも」

「え？」

「しばらく生理が来てないの。私、生理はいつも規則正しくて今までこんなに遅れたこと一度もないのよ。それに今回は生理が来る感じが全然ないの」

翌日、ふたりで病院に行き、はたして由香が妊娠5週目に入っていることが判明した。

うれしかった。本当にうれしかった。由香とふたりでお医者さんの前で手を取り合って喜んだ。由香は泣いていた。ただ、いささか不謹慎ではあるけれど、子どもができたという喜びと同じくらい、いや、もしかしてそれ以上にあの妊活の苦痛からやっと解放されたことがうれしかったのは由香には内緒にしておこう。

苦労して授かった子どもに万一のことがあつてはいけくない。僕と由香は細心の注意をはらって妊娠期間を過ごした。金沢からお互いの母親が何度も上京してきて由香をサポートしてくれたのもとても有り難かった。

(3)

子どもが双子の男の子であることは早い段階からわかっていたので、出産後も何かと大変だろうと里帰り出産することになり、由香のお腹が目立ち始めた頃、由香は金沢の実家に戻った。僕もその方が安心だ。

由香が里帰りしてからは、僕は週末は欠かさず金沢で過ごした。金曜日の仕事が終わってからでも、新宿駅南口から出ている23時発の夜行バスに乗れば、翌朝の7時過ぎには金沢駅に到着する。バスの中では寝ていればいいだけ。駅には弟が車で迎えに来てくれる。弟に由香の実家まで送ってもらい、着けば二人分の朝食が用意されていて、弟もそこで腹ごしらえをした後、一息ついてから自分の家に帰るといふパターンがいつの間にかできあがっていた。僕はそのままだ由香の家に泊めてもらい、翌日の日曜日は午後ちょっとだけ自

分の実家に顔を出してから東京に戻るとい生活がしばらく続いた。

双子を身ごもった由香のお腹は想像以上の大きさになり、週末は僕がつきっきりで由香のサポートをした。サポートとは言っても、話し相手になったり、一緒にテレビやDVDを見たり、近所を散歩したりといった程度だが。由香のご両親は僕が行くといつもごちそうでもてなしてくるので、由香の里帰り中、僕は5キロも太ってしまった。

事前に帝王切開の可能性も言われていたんだけど、10月10日、由香は無事に自然分娩で双子の男の子を出産した。僕がその日、産気づいたという連絡を受けてすぐさま会社を早退して新幹線で金沢に駆けつけたところ、病院に着いた時にはもう生まれていた。できれば出産に立ち会いたかったけどそんなことはどうでもいい。とにかく母子ともに無事で健康でいてくれたら充分だ。

「よくがんばったね。お疲れ様」

相当疲れたはずなのに、晴々とした表情の由香の顔には満足感と母親になった自信が芽生えているように見えた。

出産から4ヶ月経過してもふたりの息子と由香は東京に戻ってこなかった。とくに由香の体力も戻り、息子たちも順調に育っていたんだけど、由香の両親がなかなか手放したからなかったんだ。大地（だいち）と海斗（かいと）と名付けられた息子たちは日に日にかわいさが増量してくるし、義父母さんの気持ちもよくわかるんだけど、僕だってそれは同じだし、いつまでもそのままというわけにもいかないし、何より僕の実家から、嫁の実家が孫を独占していることに対する不満がくすぶり始めたので、事がこじれる前にやや強引に3人を東京に呼び戻した。こうして我が家4人の東京での生活が始まった。

男の子をふたり同時に育てるといのは想像以上に大変だ。機嫌の良い時はいいけれど、片方が泣くとシンクろしてもう片方も泣き出すし、お腹がすぐ時間は大体同じでも、オムツ交換やオネムのタイミングまでは合わせてくれないし、買い物するにも由香ひとりで双子を連れて出かけるのは、ふたり乗りのベビーカーを使っても至難の技だ。

歩き出すようになってからは、いつどこに行くかわからないふたりを同時に見るのがさらに難しくなった。だんだんと自己主張するようになるのとひとつのものを奪い合ったり、同じものなのにお互いの持ち物を欲しがったり、ケンカすることも多くなる。日に日に成長



するから毎日できることが増え、それに比例してしでかしてくれることも増えていく。あの時などちょっと目を離れた隙に、キッチンの引き出しにあった全ての調味料の袋の中身を盛大にぶちまけてくれたのには参った。なぜかそういうことは必ずふたり協力してやってくれるのが不思議だ。

僕が帰宅すると、子ども達を寝かしつけたまま由香も一緒に寝落ちしてしまっていることがよくある。相当疲れるんだろう。それでもチンすればすぐに食べられるように僕の夕食が欠かさず用意されているのは本当に頭が下がる。

僕の仕事が休みの日はできるだけ由香を休ませるために育児を引き受けるようにしているんだけど、そうすると今度は僕自身がゆっくり体を休める時間がなくなる。そんな時、金沢から定期的にお互いの母親が代わりばんこに子育ての助っ人として上京してくれるのは僕も由香も本当に助かっているし、ふたりの母も夢中になれる事ができて以前よりイキイキしてきたようにも感じる。

(4)

大地と海斗はすくすくと成長し、幼稚園に入る歳になった。由香には少しだけひとりになる時間ができたけれど、その時間は結局掃除や買い物に充当されることになり、なかなかのんびり骨休みするといわわけにもいかない。

それでも子育てにもいくら慣れ、少しでも余裕ができた僕は、ふと、僕たち夫婦がもう何年もセックスはもちろんキスすらしていないことに気がついた。本当はそんなこととつくにわかつてはいたんだけど、あえてそれを直視することがなかった。由香にとっては子ども達が眠った後のほんの束の間が唯一ひとりで自由にできる時間なのだから、ゆっくりと休ませてあげたいという気持ちから、あえてそういう状況を避けていたところもある。

けれども正直な話、僕自身は、まだまだ現役の男盛りだと思し、性欲がなくなつたわけでもなく、男は文字通り実際に溜まるものもあるわけで、そんな時はネットに落ちているAVをおかずに時々こっそりと自分で処理していた。

もちろん、由香にも欲求はあるだろう。

健康で成熟した女性である由香に性欲がなくなっただけではないと思う。遠距離時代はふたりに存分に楽しんでたし、不感症なんてこともなく体もそれなりに開発されてセックスの快感はちゃんと知っているはずだ。それは夫として断言できる。

家庭外に男をつくる時間もないし、考えられることは、そういう欲求を無理矢理押さえ込んでいるか、僕のように自分でこっさり処理しているか。あるいは、40歳になる直前に子どもを持った僕たち夫婦には「若くないんだから、その分しっかりと子育てしなければならぬ」という無言のプレッシャーがかかっている、特に由香の場合手抜きができない性格上、子育てに没頭するあまりセックスに対する興味を失いかけているということもあるのかもしれない。

僕の場合、まだまだ男盛りとは言ったものの、実は妊活中の義務的なセックスがあまりにも苦痛だった記憶が強く残っており、由香を性的対象として見れなくなってしまったところが少なからずあった。セックスがないならそれでもいいやと思う自分もどこかにいる。それは由香も同じなのだろうか。

そんなことを考えながらも由香に言い出すこともできず、完全なセックスストレスのまま、さ

らに1年が経過したある日のこと。

雨降りだというのに急に取引先に行く用件が入ってしまった、靴がビショビショになってしまった僕は、出先がたまたま家の近所だったこともあって、靴を履き替えようと家に戻った。家は留守だった。ちょうど由香が幼稚園に子ども達を迎えに行ったタイミングだったようだ。

靴下を履き替えるために衣装ダンスのある寝室に入った時、ふと目をやったベッドの上に、花柄のタオルに包まれたあるものを見つけてしまった。

タオルに包まれていたもの：それはキュウリの形をしたバイブレーター、いわゆる女性用の大人のおもちちゃだった。

色も大きさもちょうどキュウリと同じぐらい。実際のキュウリと同じく表面には小さなイボイボがたくさんついている。そのキュウリの上には小さなカップパがみつくような格好でまたがついていて、ペロンと長い舌を出していた。スイッチを入れるとキュウリはクネクネとうねり、カップパの舌はブルブルと振動する。バイブレーターはAVで何度も見た事があったけど。実物を手にとってみたのはこれが初めてだった。使用直後だったらしく、わずかに生々しい女性の匂いが残っていた。

ああ、由香はこれで欲求を満たしていたのか。そうか、これならひとりになれる時間がほんのわずかでも、相手がいなくても事足りるな…。ずっと気になっていた疑問がやっと溶けた。

僕の手の中でグイーングイーンと音を立ててのたうつキュウリの振動を感じながら、なぜか僕の目からは涙があふれてきて止まらなかつた。

由香が母親になっても普通の健康な女性だということがわかった安心感？こんなものを使わなくてはならない彼女に対する不憫さ？夫として男としての申し訳なさ？それともキュウリとカップパに対する嫉妬？僕自身にもその涙の理由はよくわからなかつた。

ふと我に返った僕は、キュウリをベッドの上に戻し、濡れた靴下は脱衣カゴの下に押し込み、家に帰った形跡を残さないように注意して、由香たちが帰ってくる前に急いで会社に戻った。

由香にもちゃんと欲求があること、それをこっそりと自分で処理していたことがはつきりして実際は安心した部分も大きい。要するに僕と同じことだ。全然悪いことではないし、誰かに迷惑をかけているわけでもないし、由香に確認したり問いただす必要もないこと

とだ。僕は今日知った事実は胸の奥にしまうことにした。ただ、それからはキュウリを見かけたりカップパという言葉を目にする度に、ついそのバイブレーターを思い出してしまうのにはちよつと困った。

(5)

それからまた2年が経過した。大地と海斗は幼稚園の年長さんとなり、いよいよ来年からは小学生だ。ふたりとも相変わらず元気いっぱい、個性の差も際立ってきて最近海斗は何かと口ごたえをするようになってきた。大地もすぐにそうなるのだろうか。

一方、僕たち夫婦といえば順調にセックス生活7年目に突入。キュウリの話はもちろんしていない。セックスストレスではあるけれど、僕の仕事が忙しくなり帰宅時間が遅くなるが増えた以外に特にこれといった問題もなく、平穏な日々を過ごしていた。

その年の夏休み、僕ら一家は揃って金沢に帰省した。

夫婦それぞれの実家が同じ地方にあると、できるだけ平等に両方の実家で過ごさなくてはならないという暗黙のルールができる。今回は先に僕の実家に行くことになった。

二日目の朝、朝食の席で父親が思わぬ提案をしてきた。

「洋之、今日は大地と海斗は父さんと母さんが面倒見るから、たまには由香ちゃんとふたりで食事でもしてきたらどうだ？去年南町にできたイタリアンの店のランチはお手頃価格で評判いいそうぞぞ」

「え？いいね。そうさせてもらおうかな。ねえ、由香」

「ありがとうございます。うれしいな！お言葉に甘えちゃおうかな」

「車使っつていいから」

「ありがとう。じゃ、そこに行ってみるよ」

当日じゃ予約できないかなと思いつつも電話してみたところ、幸運にもちょうどキャンセルが出たところに滑り込むことができた。

由香は車の助手席でもずつとはしゃいでいて、信号待ちにチラチラと見た横顔が本当にうれしそうだった。そんな由香を見るのは僕も気分がいい。

雑居ビルの5階にあるイタリアンレストランのトスカーナは去年のクリスマス前のオープ

ンで、正午前なのにもう多くの客でにぎわっていた。通されたのは窓際の二人掛けのテーブル席だった。

「ラッキー！お城が見えるよ」

「本当だ。ついてるね。よし。今日は奮発してこのコースランチAを頼んじゃおう」

「やった〜！」

近くにいた若い女性スタッフに声をかけ、ひとり三千円のコースランチAを注文。

「お飲み物はどうなさいますか？」

「あ、いいよ。由香、何か飲めば？帰日も僕が運転するから」

「いいの？私だけなんて悪いな」

「いいから、いいから。今日は特別だ」

「じゃ、このハウスワインをグラスで」

「かしこまりました」

高級店というわけではないけれど、料理は5品ともしっかりと仕事がされておりふたりと

も大満足。特に手打ちの生パスタは絶品で、人気店だというのも大にうなずける。最後にカプチーノとドルチェのパンナコッタが出てきた頃には由香の顔はほんのり赤くなっていた。

「ちよつと酔ったみたい」

「そうみたいだね。別に構わないよ。自分で歩けるなら」

「それはまだ大丈夫。でもグラス一杯だけなのにちよつと弱くなっちゃったかなあ」

「大地と海斗がいると、食事時に酔っぱらうわけにはいかないからねえ」

「そうなのよね」

なぜかその時、僕は『話すなら今日しかない』と直感した。今日ならふたりとも率直に本音で話せるような気がしたんだ。別に今どうしても話さなくてはならないことではないけれど、このまま永久に放置しておいていいことでもない。いつかは話すべきことだ。

僕は飲んでいたカプチーノのカップをソーサーに戻し、由香に顔を近づけて小声で言った。「突然だけど、僕たちもう何年やってないか知ってる？」

思いがけない話題に由香は一瞬驚いたような顔をしたけれど、すぐにいつもの表情に戻って答えた。

「私が妊娠して以来だから、もう7年ぐらいになるね」

「そうなんだ。それについて由香はどう思ってる？」

「うん。私もそのことはいつか話しておかなくちゃって思ってたの」

由香は少し残っていたカプチーノを一気に飲み干した。

「ごちそうさま。すごくおいしかった。お義父さんとお義母さんに感謝だね。で、その話、ここだとちよつとアレだから続きは車の中でしょうよ」

「そうだな。じゃ、そろそろ出るか」

家に戻るまでの約20分で終わる話でもなさそうなので、僕はとりあえず駐車場から車を出し、百万石通りの邪魔にならなそうな場所を探して路肩に車を止めた。

「言い出しつぺの僕の方から話すべき？」

「どっちでもいいよ」

「じゃ、僕から話す。僕は特に不満とかストレスとかあるわけじゃないんだけど、ずっとレスなのはやっぱり夫婦として不自然なのかなって思うんだよ」

「そうか、私も似たような感じ。でもひとつだけ、それが原因で洋くんが浮気しちゃうなにかつてことはちよつと心配してる」

「うーん、今のところそれは無いと思うよ。そんな時間やお金があつたら子どもたちや由香のために使いたいし」

「はは。今のところ、か」

「いや、それはその…」

「いいのいいの。未来のことはわからないもんね。で、今でも私としたいと思ってる？」

「僕は今でも由香のことが好きだし、すごく感謝もしてる。由香は本当によくやってくれてると思ってるよ」

「ありがとう。でも、それと女としての私は別じゃない？」

「まあそうなんだけど、そう言う由香はどうなの？僕としたいと思うの？」

「私も洋くんと同じ答えかな」

「僕にはもう男としての魅力はない？」

「そんなことないよ。洋くんは実際より若く見えるし今でも素敵だと思うよ。少しお腹は出てきたけど」

「じゃ、僕としたいと思う時もあるわけ？」

「私だって今でも大好きだから拒絶反応なんて全然ないよ。抱かれたくないなんてことも思っていない。ただ、若い頃ほど積極的ではなくなってきたりいるかも」

「そうだよな。僕も父親になつてからは由香のことは一緒に子育てする戦友というか、家族の一員として見るようになったというのは正直ある」

「それ、私もわかる」

「大地と海斗がいるとやる時間も場所もなかなかないしねえ」

「そうねえ」

「そうだ！明後日からは由香の家に泊まるだろ？今日みたいにお義父さんお義母さんに子どもたちを見てもらつて、ふたりでホテルに行つてみない？」

「あゝいいかも。でも今回は無理だな…。昨日生理になつちやつたの」

「なんと！」

今回の帰省ではあいにくチャンスがなかったけど、東京に戻った後、次の機会は思ったより早くやってきた。例によって金沢から僕の母が上京したのだ。

母親に本当のことを話すのはちょっと恥ずかしかったので、僕は有給をとり会社に行くフリをして先に外出、由香は子どもたちを幼稚園に送ったあと、そのままママ友とランチ会という口実で別々に家を出て駅ビルのスタバで待ち合わせするという作戦だ。母をだますのはちょっと気が引けたけど、なんだかスリルがあつて、ふたりでホテルに入る時は少しくドキキした。

遠距離恋愛期間は由香が上京することもあり、その時によく使った池袋のホテルに行ってみた。内装がすっかりリニューアルされてホテル名も変わっていたけど、10年前をいろいろ思い出して気分はそれなりに盛り上がっていた。

ところが、なんとその日僕たちの7年ぶりのセックスは不発に終わってしまったのだ。

原因は僕がちゃんと勃たなかったこと。由香も以前ほど濡れなかったこと。ふたりとも気ばかり焦って楽しむどころではなかった。お互いに妊活時代の義務的で気持ちの入っていないセックスが頭に残っていたこともあるのだろう。おまけに、大地と海斗が赤ちゃんの

頃に由香がふたり同時に授乳している姿がフラッシュバックして、僕は由香の体に素直に興奮することができなかった。

その後、様々な回春サプリメントも試してみたけれど、どれもほとんど効果はなかった。スッポンとかオットセイとか、あんなもの効きやしない。さすがに一錠五百円もするED薬を試した時は効いたけど、軽い頭痛や動悸の副作用があつた上、その時は由香の反応が悪く、お互いに満足できるようなものではなかった。

僕達は男として女としての自信をだんだん失い始めていた。

「このままだと、やればやるほど泥沼にはまっていくような気がする」

「ごめんなさい。なんだか調子が悪くて…」

「いいんだ。由香のせいじゃないから」

結局、10年も連れ添っていると自然と新鮮さやトキメキは薄れていくし、やはりふたりとも妊活の影響が大きいのだと思う。僕と由香の回春作戦は自然と途切れてしまった。

そんなある時、僕は久しぶりに同期の香川と会社の近所の定食屋で昼食をとっていた。

「ところで、大久保は奥さんとはうまくやってるか？」

「え？う、うん。まあ仲良くやってるよ。何だよ、唐突に」

「それがさ、経理の本田部長、先月離婚したんだって」

「え、そうなんだ？奥さんは確か、元、本田さんの部下だった子だよな？」

「そうそう。で、その離婚の原因がセックスストレスだったそうさ」

「セックスレス！」

僕は思わず箸を止めて身を乗り出してしまった。

本田さんは当時バツイチの独り身で、新卒で入社してきた元部下の女性と3年前に結婚したんだけど、結婚まで誰も二人の関係に気づかなかったことや年が20歳近く離れていたこともあって、当時おおいに社内で話題になったものだ。

香川の話によると、本田さんが結婚後ED気味になってしまい、ふたりであれこれ努力してみたんだけど、そのうちうつ状態になってしまった年下の奥さんから離婚話が持ち上がり、本田さんが抵抗したものだから、こじれた挙句、お互いが弁護士を立てるという事態に発展したということだ。

「子どもはいなかったの？」

「いなかった。最後はそれが離婚の決め手になったみたい。セックスレスということ以外本田さんに不利なことはなかったそうさ。要するに、条件はいろいろあるんだろうけど、夫婦にとってセックスはとても重要なもので、セックスレスは離婚の理由として法律的にも認められるってことなんだな。結局、奥さん側が本田さんに慰謝料を請求しないという条件で和解したそうさ。奥さんがうつ状態だったから、できるだけ禍根が残らないよう弁護士がうまくとりはからってくれたんだって」

「奥さんは他に男をつくったりはしてなかった？」

「してないそうさ。彼女は寿退社したけど、当時から仲が良かった彼女と同期の子からの情報だから確かだと思う」

その時の僕の脳裏には、例のキュウリとカップが浮かんでいた。

『セックスレスは離婚の理由として法的に認められる…』

僕たち夫婦とは状況が違っても、この事実は僕にとって十分にショックだった。本田さんの元奥さんがうつ状態になってしまったということも気になる。

回春作戦に失敗してからは、僕も由香もセックスに対して腫れ物に触るような扱いになっ



てしまい、そのまま放置されたこの状況でいいのか。真面目で一本気な由香のこと、女性としてのプライドが傷ついて精神的に追い詰められてはいないか…。考えれば考えるほど不安は募っていった。

ある晩、子ども達が寝ついたのを見計った僕は由香を居間のソファに誘った。

「由香、ちょっとここに座ってくれる？」

「なあに？」

「こないだ何回か挑戦したけどうまくいかなかったこと、由香はどう思ってる？」

「そのことね。私もいろいろ考えたけど仕方ないと思ってるよ。うまく言えないけど、若い頃と違ってきつと私も洋くんも、母親と父親の体になってしまったんだと思う」

「母親と父親の体？」

「そう。確かにあの時はうまくいかなくて自分自身にガッカリしたけど、それは洋くんのせいじゃないし、洋くんが勃たなかったのも私のせいじゃないと思ってる、というかそう思うようにしてるの。だって、今の私たちは以前の私たちとは違うんだし、セックス以外は全部うまくいってると思ってるから。私は今幸せだもん」

「確かに今のところセックス以外に特に問題はないよね。子どもたちも順調に育ってくれてるし、由香はよくやってくれてると思う。由香に対しては感謝しかないよ」

「愛情は？」

「あ、愛情と感謝しかない」

「私もそう。洋くんはいいパパだし、いい夫だと思う。私はお互いに理解しあっていれば、子どももできたし夫婦間にセックスは必ずしも必要ではないと思うの。したければすればいいんだけど、うまくいかないのに無理にしてもお互いストレスになるだけじゃない？それに、年取っておばあちゃんおじいちゃんになつたら、遅かれ早かれたいいの夫婦はセックスレスになるんじゃないかな？いいじゃない、プラトニック夫婦でも。むしろそっちの方が愛情レベルが高い感じがしない？」

「プラトニック夫婦か…。うちの両親もそうなのかな？」

「あはは。意外とまだ現役だったりして」

「どうだろう？…そうだ、少し飲むかい？酔っ払わない程度で」

「そうね。私、何かおつまみつくるよ」

僕が茶筆筒の奥にしまってたおきのおきの12年もののオールド・パーを開け、ふたり

分の水割りをセットしている横で、由香は買い置きのパゲットを使って、あつという間に3種類のブルスケッタをつくった。

ソファから食卓に移動した僕たちは、カチンとグラスを合わせた後、あつちやこつちに話が脱線しながらも、僕たち夫婦や子ども達の将来について、そしてプラトニック夫婦について話した。そしていくつか夫婦間のルールを示し合わせた。

◎セックスを強要しないが、しないと決めるわけではない。(したくなったらする)

◎言いたい事や不満はためこまず、その都度率直に伝える

◎お互いに遊び(プロ相手)は家族に迷惑をかけない範囲で黙認する(報告義務無し)

最後のルールについては話がかかなり紛糾したんだけど、まだ未知の領域で実際にそうなったときにお互いが(特に由香に対して僕が)どんな気持ちになるかよくわからないので仮ルールとして今後も継続審議することになった。

とにかく、今はまだ子ども達も幼く、今後少なくとも10年程度はふたりで協力して息子達

を一人前に育て上げるという共通のミッションを第一に考えればいいんだけど、子どもが成長し巣立った後、残された夫婦ふたりきりの生活はどうなるのか。

順調にいけば僕は来期から次長に昇進することが内定しているけど、10年後に会社や自分の立場がどうなっているかなんて今はわからない。由香は由香で、大地と海斗が小学生になったら仕事をしたいと言っているし、まあ、不透明な未来のことを想像であれこれ話してもあまり意味がないだろう。

「おつまみ無くなっちゃったね。キュウリがあったから切ろうか?」

「キュウリ? そう言えばさ... 由香さ、」

「そう言えば?」

「いや、あの、何でもない。あの、そうそう、竹輪の穴にキュウリ通したやつできる?」

「竹輪...、竹輪、あった! それつくるね。すぐできるから。チーズも入れるね」

「マヨネーズと七味かけてね」

「了解!」

できあがったおつまみを皿に盛り付けながら、ふと台所の窓に目をやった由香。

「あ、洋くん、そろそろ夜が明けるよ」

「ほんとだ」

いつしか外は白みはじめ、紫色の美しいグラデーションのかかった東の空の向こうからは、まぶしい朝日が顔を出しかけていた。